

千葉商科大学 総合研究センター

遠藤隆吉研究所 資料調査報告 第2号

「巣鴨学園

巣鴨高等商業学校一覽」

目次

|                                                  |    |
|--------------------------------------------------|----|
| 序文                                               | 1  |
| 例言                                               | 3  |
| 解題・論考                                            |    |
| 「資料『巣鴨学園 巣鴨高等商業学校一覧』について<br>―「建学の趣旨」と草創期巣鴨高商の特色― | 5  |
| 資料『巣鴨学園 巣鴨高等商業学校一覧』                              | 22 |
| 口絵写真                                             | 33 |

## 『遠藤隆吉研究所 資料調査報告』第2号刊行に寄せて

遠藤隆吉研究所 所長 朽木 量

2024年度から千葉商科大学100周年記念事業として、記念誌編纂事業が本格的に始まった。これに伴いサイエンスアカデミーに着任された浅沼薫奈先生を遠藤隆吉研究所の定常的プロジェクトの兼担研究員としてもお迎えし、その研究成果の一部を披露していただけたこととなった。それがこの第2号である。『巢鴨学園 巢鴨高等商業学校一覽』は短いながらも、設立間もない時期の巢鴨高等商業学校の様子を伝える貴重な資料であり、資料調査報告として復刻する意義は大きい。加えて、本号所収の解題にあるように、「建学の趣旨」の文言変化についての考証、特に「氣質」「氣風」の相違についての論考は興味深い。もともと遠藤隆吉先生は数多くの著作を発表され、個々の文章・著作には多少の相違はあるものの近似した内容を持つものも多い。前号の『家学の書』においても参考として近似する文章を掲載したのもその例である。しかし、今回の解題の指摘にあるように意識的に置き換えられたとすれば、遠藤の思考の変遷に迫るものとして評価すべきであろう。また、校地の位置についても、今後のさらなる研究が望まれる。以上のように、この復刻により、今後探求すべき方向性が明らかとなったともいえる。浅沼先生の研究努力に敬意を表しつつ、研究所として読者諸氏に今号をお届けすることができ喜びを申し述べる次第である。

## 【例言】

- (1) 本書は千葉商科大学の前身校である巢鴨高等商業学校において発行された『巢鴨学園 巢鴨高等商業学校一覧』についての調査報告書である。
- (2) 本書の資料『巢鴨学園 巢鴨高等商業学校一覧』は、基本的に千葉商科大学史料編纂室に所蔵するものを底本とした。
- (3) 調査は千葉商科大学総合研究センター内の遠藤隆吉研究所において、創立一〇〇周年記念事業実行委員会記念誌分科会の編纂開始にさきだち実施した。
- (4) 仮名表記、仮名づかい、漢字についてはすべて原資料どおりを基本としたが、編者の判断で異体字について常用漢字に改めた箇所がある。また、資料中には一般慣用と異なる用字が含まれたが、原則として原資料どおりとした。
- (5) 原資料中に掲載された口絵写真については、資料中のおおよその該当箇所タイトルのみを記載し、資料末に口絵写真の複写をまとめて挿入した。
- (6) 本書の編集および解題・論考は、浅沼薫奈（千葉商科大学サイエンスアカデミー特別客員教授・遠藤隆吉研究所客員研究員）が担当した。
- (7) 本書の著作財産権及び著作権は千葉商科大学が保有する。

## 【解題・論考】

### 資料『巣鴨学園 巣鴨高等商業学校一覽』について

#### ―「建学の趣旨」と草創期巣鴨高商の特色―

千葉商科大学サイエンスアカデミー特別客員教授・

遠藤隆吉研究所客員研究員

浅沼 薫奈

#### 1. 『巣鴨学園 巣鴨高等商業学校一覽』について

本書の資料『巣鴨学園 巣鴨高等商業学校一覽』（以下、『一覽』と略することがある）は、管見の限り、現存資料としては巣鴨高等商業学校（千葉商科大学の前身校）が発行した最も古い印刷物であり、巣鴨学園が運営する巣鴨高等商業学校の特徴や学校生活などを説明した二〇ページほどの冊子である。後述する種々の理由から、本書で紹介する『一覽』は一九三〇（昭和五）年度下半期から一九三一（昭和六）年度上半期までの間に発行されたものであると推察される。『一覽』とは「学校要覧」「入学案内」などと同類の印刷物であり、学校紹介を目的とし、入学希望者や学校関係者などに対して配布されたものである。他の多くの学校でも作成されており、創立沿革や

教育方針、学則を含む諸規程、入学試験概要などのほか、教職員および学生生徒名簿や卒業生の進路情報などを含むこともあった。

なお、巣鴨学園が併置していた巣鴨中学および巣鴨商業学校についての『巣鴨学園 巣鴨中学・巣鴨商業学校一覽』もあり、こちらは本書で取り上げた資料『巣鴨学園 巣鴨高等商業学校一覽』と同時期か、やや後に刊行されたものと思われるが定かではない。ただし、『巣鴨学園 巣鴨中学・巣鴨商業学校一覽』中において「二六、高等商業学校」（二二ページ）として巣鴨高商についての短文の説明がなされており、「今年三月第一回の第二部卒業生二十四名を出した」「開校以来僅かに三年」と述べられているので、こちらは一九三一（昭和六）年度になってからの刊行と思われる。いずれにしてもどちらの『一覽』にも奥付や発行年月日の記載はないため正確な発行日は不詳である。

本書で紹介する『一覽』の目次構成は、次のようであった。

#### 建学の趣旨

- 一、中学卒業して直ちに
- 二、専門学校の知識の必要なる所以
- 三、巣鴨学園の構成
- 四、本校の美風
- 五、本校の特色

六、学校唯一の財産は教授の知識

七、運動と校友会

八、学校は塾

九、高等商業学校は大学の何々部とは異なる

一〇、卒業生の特典

一一、人物養成

一二、生徒入学の手続

教職員氏名

実は、巣鴨高等商業学校の『一覽』には、同名だが別のものも存在する。内容構成はほぼ同じであり奥付もないが、記述内容から一九三一年度下半期頃に改訂を加えて発行されたものと推察される。

本書の『一覽』と異なる点としては、巻頭に記載された「建学の趣旨」の後に、口絵写真が三ページにわたって挿入されたことのほか、七ページ上の写真は校舎工事途中の様子がかがわれる「校舎ノ一部」であったが「第三校舎」へと差し替えられており、一三ページ下の写真は「中村博士の憲法講義」から「田中博士の講義」へ、一五ページ上の写真は「校長及びクラウス先生を繞りて」から「企業論研究指導」へとそれぞれ差し替えられていること、一六ページの末尾にある学校位置の説明のなかの「郊外であるから市中の様

な混雑はない。又池袋驛からは十二三町である。」の一文が削除されていることである。この「一二三町」というのは、池袋から二二ないし一三町ほどであるということで、一町は一〇〇×一〇〇＝約一万平方メートルであることから、池袋駅と巣鴨高等商業学校とはおよそ一二〇〇メートル超の位置にあったことになる。なお、七ページの校舎写真について補足すると、一九三〇年中は「校舎ノ一部」はまだ建築中で、新たに建築された第三校舎の落成は一九三一年一〇月三十一日のことであった。

また、一九三一年度下半期に出されたと思われる『一覽』の一七ページ以降には教職員一覽が掲載されているが、前年度のものとは比べると、一年ほどで関係教職員の顔ぶれはかなり入れ替わったと見られ、校医なども新たに着任し充実していったことがわかる。さらに巻末には「巣鴨高等商業学校規則」「入学願書」「身体検査表」「成績証明書」が新たに付されており、末尾には「巣鴨高等商業学校 東京市豊島区西巣鴨 電話大塚〇九三二・三二九〇」と記載されるなど、巻頭の口絵写真に加えて、特に受験にあたり必要となる具体的な情報が追加されている。

一方、一九三〇年一二月二〇日発行の『巣鴨高等商業学校一覽 第三年度 自昭和五年四月至昭和六年三月』も存在する。同じ『一覽』であるが、こちらは学則などの諸規則集といった内容となっており、本書で紹介する『一覽』と同時期に発行されたものではないかと思

われる。

- 第一 学年暦
- 第二 沿革
- 第三 規則
- 第四 細則
- 第五 職員
- 第六 生徒
- 第七 校地建物
- 第八 関係法令

という目次構成であり、巻末には生徒道府県別一覧や生徒年齢、生徒家庭職業などが記載された。最後に「巣鴨高等商業学校平面図（縮尺五〇〇分ノ一）」および発行日を記した奥付も記されている。

この「第三年度」の『一覧』は、以降も「第五年度」（自昭和七年四月至昭和八年三月）「第七年度」（自昭和九年四月至昭和十年三月）「第八年度」（自昭和十年四月至昭和十一年三月）「第九年度」（自昭和十一年四月至昭和十二年三月）「第十年度」（自昭和十二年四月至昭和十三年三月）「第十三年度」（自昭和十五年四月至昭和十六年三月）があり、これらはほぼ同一構成で改訂を加えながら発行された。

## 2. 巣鴨高等商業学校「建学ノ趣旨」の文言の変化について

『一覧』の巻頭に掲げられた「建学ノ趣旨」を見てみると、現在の「建学ノ趣旨」とは一部の文言が異なっていることがわかる。その変化を確認するため、現在の「建学ノ趣旨」を【A】とし、旧制期の刊行物などに記載された五つの「建学ノ趣旨」を【B】から【F】として比較してみよう。（二重線は筆者）。

【A】

建学の趣旨

能力を外にして長幼の序を認め、為にする所なくして人格の光を仰ぎ、天道の自ら至るを恐れ人倫の當に依るべきに従う。  
人類を一視して其の幸榮を増進し、有用の學術を修め質實の氣風を養い、適く所として其の天職を完うせんとす。

【B】

建学の趣旨

能力ヲ外ニシテ長幼ノ序ヲ認メ為ニスル所ナクシテ人格ノ光ヲ仰ギ天道ノ自ラ至ルヲ恐れ人倫ノ將ニ依ルベキニ従フ  
人類ヲ一視シテ其幸榮ヲ増進シ有用ノ學術ヲ修メ質實ノ氣質ヲ養ヒ  
適ク所トシテ其天職ヲ完フシ以テ上聖明ニ對セントス

【C】

建学の趣旨

能力ヲ外ニシテ長幼ノ序ヲ認メ為ニスル所ナクシテ人格ノ光ヲ仰ギ天道ノ自ラ至ルヲ恐れ人倫ノ將ニ依ルベキニ遵フ  
人類ヲ一視シテ其ノ光榮ヲ増進シ有用ノ學術ヲ修メ質實ノ氣魄ヲ養ヒ  
適ク所トシテ其ノ天職ヲ完ウシ以テ上聖明ニ對ヘントス



【D】

建学ノ趣旨

能力ヲ外ニシテ長幼ノ序ヲ認メ、為ニスル所ナクシテ人格ノ光ヲ仰ギ、天道ノ自ラ至ルヲ恐レ、人倫ノ将ニ依ルベキニ従フ、人類ヲ一視シテ其ノ幸榮ヲ増進シ、有用ノ學術ヲ修メ質實ノ氣質ヲ養ヒ、適ク所トシテ其天職ヲ完フシ、以テ上聖明ニ對セントス。

【E】

建学ノ趣旨

能力ヲ外ニシテ長幼ノ序ヲ認メ為ニスル所ナクシテ人格ノ光ヲ仰ギ天道ノ自ラ至ルヲ恐レ人倫ノ将ニ依ルベキニ従フ人類ヲ一視シテ其幸榮ヲ増進シ有用ノ學術ヲ修メ質實ノ氣風ヲ養ヒ適ク所トシテ其ノ天職ヲ完フシ以テ上聖明ニ對セントス

【F】

建学ノ趣旨

能力ヲ外ニシテ長幼ノ序ヲ認メ為ニスル所ナクシテ人格ノ光ヲ仰キ天道ノ自ラ至ルヲ恐レ人倫ノ将ニ依ルヘキニ従フ人類ヲ一視シテ其幸榮ヲ増進シ有用ノ學術ヲ修メ質實ノ氣風ヲ養ヒ適ク所トシテ其天職ヲ完フシ以テ上聖明ニ對セントス

【A】は、巣鴨高等商業学校創設以来の「建学ノ趣旨」として、現在の千葉商科大学で公的に使われている「建学ノ趣旨」である。一方、現在の「建学の趣旨」と旧制時代の資料にあるいくつかの「建学ノ趣旨」とを比較すると、いくつかの文言の相違が見られることがわかる。

【B】は、資料『巣鴨高等商業学校一覽』に掲載された「建学ノ趣旨」である。前述したように同『一覽』には奥付がなく発行日も記されていないが、本文中には「昭和三年の創立なるにも拘はらず、昭和五年八月十二日附を以て文部大臣より高等学校高等科若くは大学予科と同等以上と指定せられた」（一二ページ）との記述があることや、一九三一（昭和六）年一〇月三十一日に落成することとなる「第三校舎」の建築中の写真が掲載されている（七ページ）ことから、この間に編集発行されたものと推察される。また、底本とした資料の隅には寄贈印があり、日付は「昭和六年八月二十八日」となっている。これらの点から、この『一覽』は一九三〇（昭和五）年度下半期から一九三一（昭和六）年度上半期に発行されたものであるが、用途を考えるとおそらくは一九三一（昭和六）年度の入学希望者にむけて編まれたものと推測されるため、仮に「一九三〇年『建学ノ趣旨』」としておくこととする。現在の「建学ノ趣旨」と比較し、カタカナ標記や送り仮名の有無、漢字の新旧異体字を除き、相違部分に二重下線を引いた。

【C】は、一九三五（昭和一〇）年三月に制作された卒業アルバム『巣鴨高等商業学校 卒業記念』に収められた「建学ノ趣旨」である。【B】「一九三〇年『建学ノ趣旨』」との相違部分に二重線を引いた。

【D】は、一九三五年五月に遠藤隆吉が巣園学舎出版部から刊行した『巣鴨精神』におさめられた「建学ノ趣旨」である。【B】と比べて語句は同一であり、句読点のみ加えられていることがわかる。

【E】は、一九三八（昭和二三）年の巣鴨学園卒業生たちに贈った、遠藤隆吉の墨跡による「建学ノ趣旨」である。同資料の末尾には、「昭和十三年春二月為第一部卒業生吉日 巣園学人」と記されている。

【B】「一九三〇年『建学ノ趣旨』」と比較して二重線を引いた。

【F】は、一九四三（昭和一八）年度の「学生証」に載せられた「建学ノ趣旨」である。こちらも【B】「一九三〇年『建学ノ趣旨』」と比較し、相違部分に二重線を引いた。

以上のうち、【B】一九三〇年『建学ノ趣旨』と比較して、【C】一九三五年三月の卒業アルバムには字句の相違が多く散見される。ただし、【D】一九三五年五月の『巣鴨精神』掲載の「建学ノ趣旨」と比較してみたとき、【C】のそれは単純に誤字誤植であった可能性が高い。「幸榮」が「光榮」、「氣質」が「氣魄」となっているが、それ以外の資料ではいずれも「幸榮」「氣質」と表現されている。また、「将二」は現在「當に」と別字があてられているが、意味としては同義である。

では、「氣質」はどの時点から「氣風」となったのだろうか。

【E】一九三八（昭和二三）年に卒業生に贈った遠藤直筆の墨跡が残されていることから、この時期に遠藤自身が意図をもって「氣風」へと読み替えたと考えるのが自然であろうが、現段階では資料の制約もあって明らかではない。ただ、墨跡で残された卒業生へ贈る言葉が誤字であったという可能性は低いうえ、少なくとも【F】一九四三（昭和一八）年のものでも「氣風」が確認できるため、一九三八（昭和二三）年以降に「氣風」と表記されるようになっていき、管見の限りは同時期以降に「氣質」と書かれた資料はないことから、この頃に遠藤が意識的に「氣質」から「氣風」へと言葉を置き換えたと考えるのが自然であろう。以降、現在の【A】の「建学の趣旨」まで続いていると考えられる。こういった意図をもって「氣質」から「氣風」へと変更したのかについては今後の課題として残されるものの、ここでは言葉としての意味合いの違いについてのみ確認しておこう。

広辞苑によれば、「氣質」とは、「きだて」「かたぎ」「気性」に加えて、個人の性格の基礎となる性質などを指す言葉との説明がある。一方、「氣風」とは、「特に、ある集団や地域内の人々が共通に持っている氣質」とある。

一九三八（昭和二三）年の卒業生を前にして「氣質」を敢えて「氣風」としたとすれば、個々の持つ資質や性質重視の精神から、卒業

生という「集団」としての性質、同窓意識と自覚を持つことを大事にせよとの遠藤からのエール、メッセージであったのかもしれない。同窓生が増え、大きな同族的集団となっていくなかで、団体としての「氣質」に重きを置く学風へと変化が見られるようになっていったと捉えることもできるだろう。さらには遠藤の教育への視座、眼差しが創立十数年を経て徐々にこうした文言の変化に繋がったとすれば、わずかな字句の変化としてだけでは無い思いがそこにあったと想像を逞しくすることもできる。

いずれにせよ「建学」の時点で示された「趣旨」は、「氣風」ではなく「氣質」であった。そして一九三八（昭和二三）年の卒業式墨跡および一九四三（昭和一八）年の学生証の文言においては「氣風」と改められ、それが現在の「建学ノ趣旨」へと繋がっていったのであった。なお、当初から「建学ノ趣旨」末尾に記されてきた「以テ上聖明ニ對セントス」については、新制期以降には見られなくなった。「聖明」が「天子が知徳に優れていること」を指す意味であることから、敗戦後の諸整備のなかで天皇制を彷彿させることを避けて削除されたのではないかと思われる。

### 3. 巣園学舎から財団法人巣鴨学園へ

巣鴨高等商業学校の設立母体は、「財団法人巣鴨学園」であった。

財団法人巢鴨学園の前身は私塾「巢園学舎」といい、教育や研究および印刷出版事業などを展開していたが、巢鴨高等商業学校の開校を機に財団法人巢鴨学園を設置したのであった。この間、学校運営にあたっては財団法人巢鴨商業学校が設置されており、巢鴨高等商業学校の設立申請は財団法人巢鴨商業学校から出され、同時に財団法人名を「巢鴨商業学校」から「巢鴨学園」へと変更する申請がなされた。

巢鴨高等商業学校創立者で同校初代校長であった遠藤隆吉（一八七四―一九四六）が巢鴨に居を構えたのは、一九〇五（明治三八）年六月のことであった。日本鉄道によって大塚駅や巢鴨駅が開通し国有化した頃である。ただし、住所は西巢鴨であったが、最寄り駅は「巢鴨」ではなく、「大塚」であった。

教育とは私学こそが担うべきとの考えを抱いていた遠藤は、徹底した実学主義のもと、私財を投じ、一九一〇（明治四三）年に私塾「巢園学舎」を設立、同地において自らが理想とする教育を実践することにしたのである。

遠藤は巢園学舎において、「硬教育による英才教育と人間研究の実践」を目指していた。「硬教育」とは努力主義とも解され、特に文武の鍛錬、人格の陶冶を実践するための方法論が研究された。巢園学舎設立より二年前の一九〇八（明治四一）年には「日本社会学研究所」を私的に設置しており、同研究所からは遠藤独自の「硬教育」

に関する理論や発音統計論など多様な内容を含む『論集』を発行したが、継続が難しくすぐに廃刊となった。自身の研究を精力的に進めるためにも、独自の出版部と印刷所の開設は必須であると考えた遠藤は、その目的を達するために一九一〇（明治四三）年より学舎内にあらためて社会学研究所を置き、同時に巢園学舎出版部および印刷所を設置したのであった。その後、易学研究所を並置したのは一九一七（大正六）年の頃であった。

巢園学舎出版部は一九一四（大正三）年より『国粹全書』の刊行を開始、全二四巻からなる全集を完成させた。また、社会学研究所と易学研究所の二つの研究所からは講義録、社会及び国体研究などが次々と刊行された。遠藤は多数の著作を残しているが、その多くは巢園学舎出版部から出されたものである。

さて、遠藤が巢園学舎の事業拡大に踏み切り公的機関として本格的に学校運営を開始したのは、一九二二（大正一一）年の巢鴨中学校設立以降のことであった。翌一九二三（大正一二）年には巢鴨商業学校が設置され、さらに一九二八（昭和三）年より財団法人巢鴨学園へと移行し、巢鴨高等商業学校が開設された。

前述の『巢鴨学園 巢鴨中学校・商業学校一覧』によれば、「巢鴨学園といふ名は二様の意味に用ゐられて居る」とし、一つは広義の意味で「一切の事業を包含したるもの」であり、もう一つは「中学校を始め高等商業学校や商業学校を包含する財団法人である」と

される。さらに「財団法人は学校経営上の団体である。兎に角学園は広いものであつて社会に対し、国家に対して思想上教育上の使命を有つて居るのである」(以上、三ページ)とも述べている。つまり、それまでの事業を包括したうえで、学校事業を新たに展開し発展させることを期していたのである。

では、財団法人巢鴨学園は、巢鴨高等商業学校をどのような学校と位置づけていたのだろうか。ちなみに「高等商業学校」とは、旧制専門学校(高等実業学校)のうち商業や商学に関する高等教育機関を指す総称である。

本書『一覽』の「二」には、「専門学校以上の学校が必要」な理由として、次の二点が挙げられている。

一つは、「世の中には専門の学問といふものがあるといふこと」そのものを知ることができるため、とする。日常生活のあらゆる局面において、それらの専門家や学者がいて専門的な研究がなされていること、つまり専門学校で学ぶことにより、「社会といふ大きな家の「間取り」を知ることができるというのである。社会の構造そのものを知り、理解するためにも「専門学校」という高等教育を受けることが必要であると説いている。

もう一つは、社会に出て「普通の紳士」が議論を行うにあたり、彼らはそれぞれの専門性に立って会話をしているということを理解するためであるとする。専門的な教養を積んだ「先覚者」たちは、

己の研究してきた専門的「立脚地」から発言する。どの「立脚地」に立ち発言しているかを知るためには、「中等学校の智識」だけではおおよそ足りず、専門学校での研鑽が必要であるとしている。

巢園学舎としてはすでに巢鴨中学校や巢鴨商業学校といった学校を擁していたが、こうした考えにもとづき社会においてより活躍する有用な人材を輩出せんとする志を実現するため、「財団法人巢鴨学園」へと発展し、高等教育機関である巢鴨高等商業学校を並置する必要があつたのである。

なお、財団法人巢鴨学園が設置していたのは、『一覽』によれば八機関であつた。「高等商業学校」のほかに、「中学校」「商業学校」「商業学校第二本科」「中等夜学校」「東亜協会」「易学研究所」「日本社会学研究所」をあげている。商業学校第二本科と中等夜学校というのは、夕方以降に開講する夜間部のことで、いずれも中等教育機関に相当する。また、易学研究所および日本社会学研究所は前述したように、巢園学舎の時代から続く創立者遠藤隆吉の専門に基づく研究機関であつた。一方、巢鴨学園のなかでも特殊な存在であつたのが東亜協会の存在であつた。『一覽』のなかでは「東亜協会は雑誌大東を発行し、更に数種の講義録を発行せん」と簡潔に説明しているが、その設置経緯はやや複雑であつた。

東亜協会は、「我邦ノ精神界ヲ指導シ兼テ教育ヲ刷新シ文学ヲ振興」することを目的に、一九〇六(明治三九)年六月に発足した学



術団体であった。同会の実質的創設者は井上哲次郎であり、会長には井上が就任した。井上と井上の弟子たちを中心として同会の会員は構成され、その活動の中心は機関誌『東亜之光』の刊行であった。『東亜之光』発行の傍ら、例会や研究会、講演活動などが続けられ、多くの知識人たちの研究や論稿などが発表されたが、基本的には井上哲次郎を中心とした会であり井上のための機関誌という性格が初期には特に強かったと言える。ただし、『東亜之光』第一巻第一号から第六巻第十号までの出版人は遠藤隆吉がつとめており、遠藤は一九〇八（明治四一）年より東亜協会の評議員として同会運営に携わっているため、同会の活動の中心にいたと言ってもよいだろう。井上は遠藤の東京帝国大学在学時の恩師であり、「弟子」の一人として運営に関わっていたのであるが、一九二九（昭和四）年五月から八月までに東亜協会総務となると同時に井上から協会の全事業を継承し、さらに一九三四（昭和九）年から巢園学舎出版部から刊行するにあたって編集責任者となった。発行元を巢園学舎出版部に変更するにあたって、『東亜之光』を『大東』へと誌名をあらためており、雑誌『大東』は一九四一（昭和一六）年まで発刊された。この間、『大東』刊行は巢園学舎出版部の主要事業の一つとなった。

#### 4. 巢鴨高等商業学校の特徴

『二覧』によれば、巢鴨学園の特徴の一つが「長幼有序」（「四」、五ページ）であると述べている。「長幼有序」とは「長幼之序」ともいい、儒教において年長者と年少者との間で守るべきとされる序列のことである。巢鴨学園における教員と生徒とのあり方、ひいては遠藤隆吉と生徒との理想的関係性として、この言葉を掲げたものである。『二覧』においては単に「先生」とのみ書かれている箇所が多数散見されるが、ほとんどの場合、これは創設者遠藤隆吉を指しており、儒教思想の「孝」のもと、先生と生徒との関係は「親子のような親密さ」であり、「学園は遠藤先生の大なる家庭である」（「八」、一〇ページ）とする。遠藤については「二一」において「事実は総裁である」と位置づけており、遠藤自身は「学者」であるが、学問以上に重要であると考えるのが「人物が第二」「人格が第一」であるとして、人となり、つまりは人柄であるとする。「一人前の人格者として社会に送り出」すことこそが巢鴨学園の考える重要な役割であると示しているのである。このことから、教育方針としては、現代社会の求める人材は人格の高潔さであるため、「飽く迄眞面目なる人物を養成」（「五」、六ページ）することであるとしている。また、特に巢鴨高商の「一大特色」としては「各先生は何れも熱心」であるということをおいており、「第一の財産は教師の人格と学問」

〔六〕、七ページ〕であるとする。基本的に休講する教師はおらず、朝八時から空いた時間はなく、知識抱負な教師陣による授業が展開されていると述べている。教師にせよ生徒にせよ、「人格」を重視した教育を徹底していたと見られる。

〔七〕（八ページ）においては生徒たちの学校生活について触れており、生徒定員については、昼間部の第一部三百名、夜間部の第二部三百名と定めており、校舎は二棟あってそれで現状は充分こと足りているものの、今後は「第三棟が落成し、更に鉄筋コンクリートの塔屋が出来る」とある。ただし、卒業生名簿を確認すると当時の生徒数は一学年につき百名以下の在籍者数であったようで、実際には定員より入学生は少なかったようである。一期生は、一九三二（昭和六）年三月卒業の第二部生が二四人、一九三二（昭和七）年三月卒業の第一部生が七三人となっている。ただし、これ以降は生徒数は年々増加傾向となった。

開校当初より課外活動は活発に行われており、校庭にはテニスコートが整備され、郊外には野球の練習場を用意し、そのほか水泳、馬術、剣道、柔道、ピンポン、音楽、端艇が行われているとある。運動部のほかに、雄弁部、語学部、文芸部などの部活動があったという。なお、『二覧』末尾には「巣鴨学園の歌」の歌詞のみが付されているが、同歌の作曲は東京音楽学校（現、東京芸術大学）教授をつとめた著名な音楽家である山田源一郎が手掛けている。

目次によれば、〔八〕（一〇ページ）は「学校は塾」、〔九〕は「高等商業学校は大学の何々部とは異なる」と題している。「塾」というのは、前述したように遠藤校長のもと、遠藤夫人も協力して家庭的な旧来の「私塾」的運営がなされていることを指している。また、大学の学部とは異なり「一個の専門的に独立資格」を持っているのが高等商業学校であり、社会からの信用もより厚いことを特徴にあげている。

〔一〇〕（一二ページ）には「卒業生の特典」として、商業科の教員免許取得に加え、成績によっては英語科の無試験検定資格が得られるとある。「計理士」の称号登録もでき、これらは夜間部を卒業しても昼間部と同等の資格を得られる稀有な学校であると述べている。また、旧制期において特に重視された在学中の徴兵猶予も昼間部夜間部ともに認められていた。一方、卒業後の「幹部候補生」というのは入営時において予備役の下士官以上の候補者となることを指したものであるが、この幹部候補生の資格を得られたのは昼間部の生徒のみであった。

##### 5. 財団法人巣鴨学園の位置

『二覧』の〔一二〕（一六ページ）には、「位置は大塚に近い。山手線でも大塚驛で下車する。市内電車も大塚終点である」とある。

大塚駅に近いことは前述したとおりで、当時の進学案内雑誌や学校紹介など他の多くの資料においても確認できる。一方、興味深いのは『一覧』中に「巢鴨高商通りといふを経て本校に達す」とあることである。設立から間もない時期に、すでに「巢鴨高商通り」の名称が学校までの道中にあったことを示している。さらに池袋駅からの距離も示されていることから、池袋から一二町（約一二〇〇メートル）程度を徒歩で通学していた生徒もいたかもしれない。

さて、巢鴨中学および巢鴨商業学校と巢鴨高等商業学校とは道を隔てて校地が分かれていた。創設期の各種出版物にも「二町ほど離れ」たところ、つまりはおよそ二〇〇メートルの距離にそれぞれの校舎があると記されている。では、具体的にはどのような位置関係にあったのだろうか。

校地については、巢鴨中学校と巢鴨商業学校とは同地とされたが、巢鴨高等商業学校は当時の地図を確認してもやはり別区画に位置しており、正確には住所も異なっていた。いずれの学校も財団法人巢鴨学園の所在地であった「東京都豊島区西巢鴨町二丁目」とだけ表記されることが多かったが、巢鴨中学校および巢鴨商業学校は「西巢鴨町（大字巢鴨）二丁目」の「二六三九番地」であり、巢鴨高商は「西巢鴨町（大字巢鴨）二丁目」の「二六〇三番地」であった。これは夜間部もあったことから、校舎や教室の利用計画が関係していたかもしれない。

ちなみに当時の巢鴨高商の校地図を確認すると、校地脇には「小川」と書かれており、おそらく「谷端川」と呼ばれた小川が校舎のすぐ隣に流れていたのではないだろうか。谷端川は玉川上水を源流とする池袋西側の千川上水から板橋の東南部をとり、巢鴨新田の脇から大塚へ向かって流れていた。谷端川はその後の下流域では小石川と名を変え神田川に合流していたが、現在は暗渠となつて姿を消している。

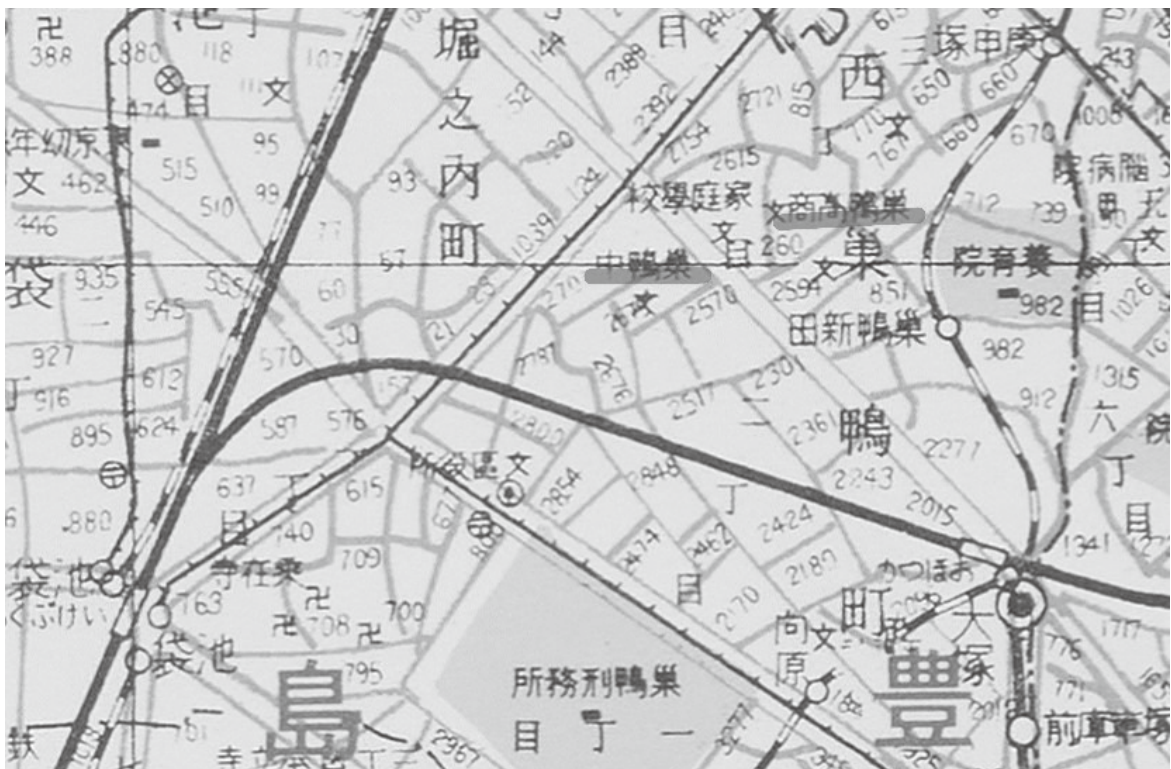
校舎を新設する必要というだけでなく校地を離れた理由については、『巢鴨学園 巢鴨中学校・商業学校一覧』において、次のように述べている（二三ページ）。

此れは中等学校と多少にても離す方が教育上必要であるのである。此れ亦周囲に樹木多く、落ち着いて極めて閑静である。本学園は津田沼に数万坪の土地があるから其の内には何等か発展するだろう。

「教育上必要」というのは、たとえば「中学と商業との別」として、「本学園の方針は両者を通じて異なることはない」「朝礼暮礼を始め同じ校庭で一所にやる」けれども、「中学と商業とは学校の性質、生徒の目的を異にする」ために卒業後の進路も異なるため、「教育の方法と課程とに於ては大に異なる者がある」（以上、『巢鴨学園



巢鴨中学校・商業学校一覽』四ページ）として、中学では卒業後を考慮した課外授業も行い、商業学校では珠算習字に集中した実践教育を中心に行っているとしている。このことからわかるように、巢鴨学園としての教育理念は共通するものの、それぞれの学校に適した教育を行うにあたって、校地を離すことが必要と判断したものであった。特に高等商業学校は専門学校という高等教育機関であるため、こうした課外授業などの区分以上に、それぞれが独立した校地校舎で教育を行うことが適していると考えたのであった。



1933（昭和8）年豊島区地図上に記載された「巢鴨高商」と「巢鴨中」

## 6. 一九三二（昭和六）年度までの「沿革」と慣習

本書で紹介する『一覽』にもおおよその学年暦が記載されているが、沿革を踏まえてより詳しく記載があるのは一九三二（昭和七）年一二月に発行された『巢鴨高等商業学校一覽 第五年度 自昭和七年四月至昭和八年三月』である。こちらに依拠すれば、一九三二年三月までの主な出来事は次のようであつた。両資料から巢鴨高等商業学校揺籃期のあゆみを確認してみよう。

### 昭和二年

十二月十日

財団法人巢鴨商業学校評議員会ノ決議ニヨリ寄付行為ヲ変更シ巢鴨学園トナシ事務所ヲ東京府西巢鴨町巢鴨商業学校内ニ置ク同時に高等商業学校設立認可ヲ申請ス

### 昭和三年

二月八日 文部省告示第五十一、五十二號ヲ以テ巢鴨高等商業学校ヲ東京府下西巢鴨町一六〇三番地ニ設置ノ件認可セラル、設立者文学博士遠藤隆吉本校校長ニ就任ス

四月三日 巢鴨商業学校ニ於テ本校第一回（第二部）入学試験ヲ施行ス

四月二十三日 巢鴨商業学校ニ於テ本校第一回（第二部）生徒入学式ヲ挙行シ授業開始ス

五月十九日 巢鴨学園創立記念日ニ當リ入学宣誓式ヲ挙行ス

### 昭和四年

一月十日 生徒成績考査細則及生徒服装規定ヲ制定ス

四月二十三日 昨年末ヨリ校舎建築作業中ノ處一部竣成セシヲ以テ本日ヨリ新校舎ニ移転ス

十月十六日 第二校舎新築落成ス

十二月七日 図書閲覧室ヲ開ク

### 昭和五年

八月十二日 文部省告示第百九十三號ヲ以テ大正七年文部省第三號第二條ニ依リ高等学校高等科若クハ大学予科ト同等以上ト指定セラル

### 昭和六年

三月八日 巢鴨学園ニ於テ本校第一回生徒（第二部）卒業証書授与式ヲ挙行ス

十月二十日 本校学則中改正ノ件認可セラル

十月三十一日 第三校舎新築落成ス

十一月二十二日 巢鴨学園創立十周年記念祝賀式ヲ挙行ス

## 昭和七年

三月六日 本校第一部第一回第二部第二回卒業証書授与式ヲ挙行ス

この略年譜から明らかとなるいくつかの事実について確認しておく。

(1) 一九二七（昭和二）年一二月に財団法人巢鴨商業学校は寄附行為変更を行い、「財団法人巢鴨学園」へと移行、財団法人巢鴨学園が巢鴨中学、巢鴨商業学校、巢鴨高等商業学校などの運営母体となった。寄附行為変更申請と同時に巢鴨高等商業学校の設立申請を行っている。

(2) 巢鴨高等商業学校は財団法人巢鴨学園を運営母体として、一九二八（昭和三）年二月八日に設立認可を受けた。

(3) 一九二八（昭和三）年四月三日に行われた第一回入学試験は、「第二部」のみであった。「巢鴨高等商業学校規則」によれば、第一章総則第三條において「本校第一部（晝間）第二部（夜間）ヲ置ク」とあるので、第二部というのが夜間開講であったことは間違いない。第二回入学試験の日程は記されていないが、一九三二（昭和七）年三月六日に「本校第一部第一回第二部

第二回卒業証書授与式」が挙行されているので、一九二九（昭和四）年四月には第一部、つまり昼間開講の生徒募集と入学があったと見られる。

なぜ第一部と第二部との第一期生の入学に一年のズレが生じたのかは、新校舎の「竣工」の時期が関係しているのだろう。第二部の夜間部だけであれば、巢鴨中学や巢鴨商業学校の生徒の下校後に授業を開講することができる。「昨年末ヨリ校舎建築作業中ノ處一部竣成セシ」ため、一九二九（昭和四）年四月二三日より「新校舎ニ移転ス」とあるので、第一部および第二部の生徒収容の目処が立ったと見られる。さらに同年一〇月一六日に第二校舎が「新築落成」し、一九三一（昭和六）年一〇月三一日に第三校舎が「新築落成」した。第一期生が卒業するまでの間に校舎が増築され、教育施設環境が整えられていったことがわかる。

なお、「学校規則」によれば、第一部の定員は三百名、第二部の定員は三百名であった。ただし、前述したとおり、第一部一期生の卒業生数は七三名、第二部一期生の卒業生数は二四名となっており、初期の実態としては定員よりも少ないものであった。

(4) 財団法人巢鴨学園としてのあゆみを辿ると、五月一九日を「巢鴨学園創立記念日」としている一方、一九三一（昭和六）年

十一月二二日に創立十周年を迎えたとして、創立記念祝賀会を挙行している。この「創立十周年」は、一九二二（大正一一）年に開校した巢鴨中学校を創設した年を起点としたものである。

なお、現在の千葉商科大学は慣例として五月一日を創立記念日としているが、五月という点では旧制時代の巢鴨学園の創立記念日の慣例を引き継いだとも言える。創立記念式典についても、千葉商科大学は創立九〇周年記念式典を二〇一八年十一月一七日に実施しているが、巢鴨学園創立十周年の実施時期から見て整合性が取れている。創立八〇周年記念式典は二〇〇八年五月二五日に実施しているが、こちらは創立記念日に近いものである。

一方、本書の資料『一覧』においては、「五月十九日は巢鴨学園全体としての記念日であり、十一月二十五日は学校創立記念日である」といった記載が見られるが、巢鴨高等商業学校の設立申請は一九二七（昭和二）年二月一九日であり、翌年二月八日に設置認可を受けている。また入学試験および入学式は同年四月であったため、ここで言う「学校創立記念」は、創立十周年記念祝賀会の開催記録から推測されるように、巢鴨中学の開校を根拠としたものである。

(5) 一九三一（昭和六）年一〇月に初の学則改正が行われている。

このときの改正は、授業科目の改正と「休学」に関する規定などの整備であった。

授業科目については「商事要項ヲ商業通論」「商業算術ヲ商業数学」へとそれぞれ変更することを申し出ている。休学に関しては、「巢鴨高等商業学校規則」第八章「休学退学」は、次のようであった。

第四十四條 疾病又ハ止ムヲ得サル事故に依リテ三ヶ月以

上修学スルコト能ハスト思料スル時ハ保証人連署

ヲ以テ学校長ニ願出テ許可ヲ得テ其ノ学年間休学

スルコトヲ得但シ疾病ニ依リ休学セントスル場合

ニ於テハ願書ニ医師ノ診断書ヲ添フルヲ要ス

このように休学に関して定められていたが、一九三二（昭和七）年度より次のようにあらためられた。

第四十四條 疾病又ハ止ムヲ得サル事故に依リテ三ヶ月以

上修学スルコト能ハスト思料スル時ハ保証人連署

ヲ以テ学校長ニ願出テ許可ヲ得テ其ノ学年間休学

スルコトヲ得但シ疾病ニ依リ休学セントスル場合

ニ於テハ願書ニ医師ノ診断書ヲ添フルヲ要ス

前項ニ依リ休学ヲ許可セラレタル者ハ次学年ノ始  
メヨリ原学年ノ課程ヲ修メシム

但シ休学期間中其ノ事由消滅スルトキハ許可ヲ得  
テ当該学年ニ於テ随意ノ学科ノ教授ヲ得クルコト  
ヲ得

三ヶ月以上の休学をした者が復学するにあつての詳細が  
加えられていることから、実際に休学退学者のために現実的  
に必要なが生じたことで対応がなされたと考えられる。



## 【資料】『巢鴨学園 巢鴨高等商業学校一覽』

建学の趣旨

能力ヲ外ニシテ長幼ノ序ヲ認メ為ニスル所ナクシテ人格ノ光ヲ

仰ギ天道ノ自ラ至ルヲ恐レ人倫ノ將ニ依ルベキニ従フ

人類ヲ一視シテ其幸榮ヲ増進シ有用ノ學術ヲ修メ質實ノ氣質ヲ養ヒ

適ク所トシテ其天職ヲ完フシ以テ上聖明ニ對セントス

【巻頭口絵写真「本校舎」】

一、中学卒業して直ちに

二、専門学校の知識の必要なる所以

三、巢鴨学園の構成

四、本校の美風

五、本校の特色

六、学校唯一の財産は教授の知識

七、運動と校友会

八、学校は塾

九、高等商業学校は大学の何々部とは異なる

一〇、卒業生の特典

一一、人物養成

一二、生徒入学の手続

教職員氏名

一

世の中には中学校を卒業して、高等学校へ入学するのとて、二年も三年も準備して居る者もある。此れは大なる考え問題だ。其れよりも三年で卒業出来る専門学校を卒業して一段落を付け、其の上で更めて大学に入るが宜い。萬一大学に入れないとしても一段落ついて居る。専門学校を卒業すれば早く言えば重役級にも進めるのである。



二年でも三年でも二十歳前後の肝要の月日を準備のために浪費するのは惜しい。友人は既に専門学校を卒へて相当の資格を得、相当の会社に入り、又或は更に帝国大学に入学せんとして居るなど、いふのに、自分が愚図々々して居ると終には悲觀狀態に陥ることになる。況して高等学校に依らずして官立大学に入ることが出来るに於てをやである。此れがウアイズなやり方ではないか。青年有為の士の志を決すべき所であらう。

## 二

何故に専門学校以上の教育が必要であるか。其れには二つの理由がある。一つは世の中には専門の学問といふものがあるといふことを知るのが日常生活のために極めて重要であるのである。例へば日常使つて居る電燈電話のことにしても、食物衣服のことにしても、其れを専門的に研究する学問があり、又学者があるといふことを知つて居れば、分らないことがあれば其處へ行けば宜いといふ的がある。保険のことでも各々専門がある。どんな専門があるといふことを知るのは社會といふ大きな家に入つて其の間取りを知るのである。第二に社會の先覚者は皆己れの研究して居る方面から議論する。例へば一事件があつたとする。倫理学者は道德學の方面から、法律學者は法律學の方面から、經濟學者は經濟學の方面から議論する。之を読む者は彼氏は倫理學の立脚地からいふて居るのだ、彼氏は法

律學の立脚地からいふて居るのだといふ風に其の立脚地が分るといふと假令其の人丈の議論は立たないにしても其の説は能く分り、従つて又世間が分る。是の故に各種専門學は大略で宜いから知つて居る必要がある。之を知つて始めて社會に立つて普通の紳士と言はるゝことが出来るのである。中等学校の智識丈ではまだ世間の深い處は分らない。

## 三

学校に官立あり、公立あり、私立ある。官立公立は学校として何等の特色もない。特色あるのは私立である。私立の中にも吾が「巢鴨」の如きは最も特色あるものである。巢鴨は文学博士遠藤隆吉先生の創創せる学園で、此学園の中から位置社會を風靡せる硬教育や人文東洋主義が出た。近時に到つては人性解放問題、文化祭等の精神的潮流が捲き起つて居るのである。其の設備としては目下の處

高等商業学校

中学校

商業学校

商業学校第二本科

中等夜学校

東亜協会

易学研究所

## 日本社会学研究所

などである。生徒は全部合して三千名以上。東亜協会は雑誌大東を發行し、更に数種の講義録を發行せんとして居る。易学研究所は易学講義録を發行し、更に日本全國に互れる迷信の指導を以て任じて居る。日本社会学研究所は社会学研究を目的とする者であるが、大正八年には新思想の尖端を切つて社会及國體研究録（十二冊）を發行し數十萬の會員を指導した。今又新たに、社会改良を中心とする社会学講義録の刊行を見んとする。其の他にも種々なる事業があるが、兎に角一貫せる思想の上に次第々々に建設せられたるものであるのである。

## 【口絵写真「校長室に於る校長」】

## 四

本学園に於ては「孝」を以て人倫道德の核子となし、「長幼有序」を以て其の發現の第一歩とする。君に忠も是れであり、兄弟に友も是れである。故に学園内に在りては各先生の間にも長幼の序があり、生徒の間にも長幼の序がある。況んや生徒の先生に対するに於てをや。

而も先生は常に「生徒のためにし、学校のためにするのは学問を修むると同じだ」と言ふて全力を傾け、日夜を通じて倦むことを知らない。一生徒の言ふ處であつても其れが眞に生徒のため学校のた

めになることであれば直ちに之を採用する。其の代り全生徒が言ふても、生徒のためにもならず、学校のためにもならない場合には承知しない。故に学校は常に明るく清らかである。生徒で生意気な容姿をして居る者はない。自然に出来ないものである。何れも眞面目にならざるを得ないのである。此れ實に本校生徒の美風である。殊に先生は其の該博なる学識と無限の経験と卓越せる識見とを以て日常生徒に接近せられ、之を愛撫すること子の如くである。官立学校の総長や校長が高く自ら標榜し、生徒と接近することなく以て其の位置を維持するのは全く其の趣きを異にする。是れ實に本学園学風の来る所である。

## 【口絵写真「隅田川上の巢鴨高商クルー」】

## 五

吾が巢鴨高等商業学校教育方針は飽く迄も眞面目なる人物を養成せんとするのである。現代の様な各種の主義の行はるゝ時世に當つては批判力をつけることが必要であるとの先生の見解から、哲学文化史などにも大に重きを措くのである。又人格主義で何處迄も人格を涵養せんとする所から宗教学をも正科として教へて居る。英語にしても實用主義を以て足れりとししない。英吉利紳士の心情に触れんため純粹英文学の書物を用ゐて居る。此く文科的学科に由りて批判力を養成し人格を涵養し、其の上に経済学的商業学的智識を授けん

とするので此れ亦他の高等商業学校と断然其の学風を異にする所である。現代の如く専門学校以上の卒業生が年々千を數へらるゝ際には、社会の要求するのは有資格者といはんよりは寧ろ人格の高潔なるものである。此の如き人があれば多少の無理はあつても採用せんとすることになる。又本校に於ては卒業生の就職に就いて特に苦勞し人事課を置き校長自ら之を管掌して居る。

#### 【口絵写真「巣鴨高商野球部選手」】

### 六

学校第一の財産は教師の人格と学問とである。校長遠藤先生は最も此に注意せられ将来有望なる新進の学者を選んで教授の任に當らせて居る。何れも何か書いた者、書物でも雑誌の論文でも、其れを先生が見て感心せられた人々である。故に本校の教授は皆将来一方の大家を以て囑望されて居る人々である。偶に著述のない人があつても、中学、高等学校、大学皆首席で通して来たといふやうな人である。講師には老練の先生が多く、従て其の講義は解り易くして面白く、時間の経つのを知らないものが多い。

時間表も朝は八時に始まり一時半若くは三時半に終る。其の間に齒の抜けた様な空いた時間はない。夜は五時半に始まり、十時五分に終る。此れ亦一つの空いた時間もない。夜の教練は日曜日を利用して居る。又第二部（夜学）は学期の終りに何日間か纏めて或る学

科を履修させる。

各先生は何れも熱心で缺勤など極めて稀れである。是れが本校の一大特色であると称せられて居る。又正味五十分を講述して早く切り上げたり、又は後れたりする様のことはない。萬一缺勤でもあれば時間を繰り上げることもある。此れ亦他に見られない特色の一つであらう。

#### 【口絵写真「校舎ノ一部」】

### 七

学校生徒の定員は第一部（晝間）三百名第二部（夜間）三百名である。多いといふと訓育が届き兼ねるので此位に止めて置くのである。校長先生初め各先生は皆生徒の氏名性行を知つて居り又知るところに勉めて居る。然もなくば指導することは出来ないからである。校舎は三百人に對しては二棟で充分であるが今第三棟が落成し、更に鉄筋コンクリートの塔屋が出来るといふ。

運動は学校創業日尚ほ浅いけれども校友會としてテニス部はコンクリートの立派なコート有し、野球は郊外に其の場所がある。其の外水泳、馬術、剣道、柔道、ピンポン、音楽、端艇何れも活動して居る。又雄弁部、語学部、文芸部がある。特に大書しなければならぬのは兵式教練である。先生は教練を以て修身の一科として居る。規律の觀念不動の姿勢即ち精神修養の一大要諦であるとして居る。

る。殊に先生は平和主義人道主義を以て理想として居らるゝものであるが、世界の大勢に順応して国民皆兵の必要を唱へ、配属将校制度に先つて現役の将校を中学に聘して教練をやつて居られた。其の様な譯で教練は最も嚴格で発火演習なども時々やるが、生徒は皆喜んで参加する。此れ亦本校気風の一大特色であらう。

#### 【口絵写真「校庭コートに於るテニス」】

### 八

学園は遠藤先生の大なる家庭である。故に生徒に病人があると先生始め令夫人の手迄煩はすことが少くない。先日一人の生徒が少し神経衰弱にかゝつた。先生は種々之を慰めてやつたが令夫人に相談せられ、令夫人が種々介抱し、又宿舍の良くないためだとて、夫人自ら宿舍を探がしてやられた。そのみでなく令息達と一所に遊ばせて本人の気分を開かせる様にとせられた。又或る生徒が学資の缺乏を感じたとき令夫人は特に或る仕事を手傳はせて之を支給してやられたこともある。又病人があるといへば校長宅に駆け付けるのは普通のこと、應急薬品類は事務室にも備へ付けてあるが先生の家に行く方が多いのである。であるから学校は即ち塾の様なものである。此れが又暖か味を感じる一大特色であらう。

### 九

高等商業学校は、大学の何々部といふのとは意味が違つて居る。高等商業学校は一個の専門的に獨立資格を有つたる学校である。高等師範学校、高等工業学校、高等商船学校などといふと同じである。所が何々部といふのは一つの学校の中に多くの部があり、其の中の一つだといふことになるから大量生産中の一つとも見られ、又附屬的のものとも見られる。是れは感情問題の様だけれども其の感情問題の影響する所は甚だ大である。先年或る大学の学生が三人打ち揃ふて先生を訪問し「僕等は高等商業部の生徒ですが高等商業学校とするには如何したら宜いですか」と問ねた。先生は「何故そんなことをいふか」と問ふたら、「おかしい話ですが高等商業学校といふのと高等商業部といふのでは社会の信用が違います。高等商業学校といふと厚く、高等商業部といふと薄く、就職当時の月給にしても五圓乃至十圓の差がありますから」といふたといふ。此邊も亦大に考へなくてはならぬことである。

#### 【口絵写真「ピンポン部の猛練習」】

### 一〇

本校は實業学校令と専門学校令とに拠つて設立認可せられた者である。昭和三年の創立なるにも拘はらず、昭和五年八月十二日附を以て大(文)部大臣より高等学校高等科若くは大学予科と同等以上



と指定せられた。校舎が未だ完成せず、学年が未だ完成せざるに此くの如き指定を得たのは破格と称せられる。生徒の中には或は東北大学の文科とか、或は神戸商科大学などに入学を志して居る者も少くない。

第一部第二部共に修業年限は三ケ年で而も全然同一の資格である。夜の高等商業学校で資格のあるのは本校のみである。晝間は会社銀行等に勤務し、夜の時間を割いて通学すれば一定の資格が得られる。三ケ年は短かいもので知らぬ間に過ぎて了ふ。之れは後に官立の大学に入学するなり、予備試験は免除されるから、高等文官本試験を受けるも宜い。又在学中の成績に由つては英語科の無試験検定が得られる。商業学校の免状は卒業すれば誰でも得られる。殊に計理士と称することを得るので、登録すれば宜いのである。計理士は会社銀行又は法人の帳簿に関する顧問であるが、又大に活動の余地がある。乃ち内外の事業に通ずれば今某の会社を興さんとするが果して中るか何うか等の根本的相談に應ずることも出来る様になる。

又第一部は幹部候補生の資格がある。第二部は徴兵猶予の資格がある。此れも早晚第一部同様幹部候補生の資格が得られさうだ。本校にては第二部より第一部に第一部より第二部への転部は教授会の決議を経て許可せられることになつて居る。

## 【口絵写真「中村博士の憲法講義」】

### 一一

巢鴨学園には事業が多いが其の代表者即ち総裁は遠藤先生であり、又同時に校長である。詰り官省への届け名は校長であり、事實は総裁である。先生は学園に入り来れる生徒は一人の落伍者もなく皆之を一人前の人格者として社会に送り出さんとするのである。先生は常に言ふて居る。学問の出来る許りが成功の道ではない。人物が第一である。意思の強いのが根本である。死んだ大倉喜八郎氏や浅野總一郎氏などは学者といふ譯ではない。否寧ろ目に一丁字ないといふても宜いかも知れない。其れでも意思が強く其の度量に於て勢力に於て非凡なるものがあるから彼の如く成功し、博士学士諸先生が其の下に使役されて居る。人物が第一だ。人格が第一だと。先生は中学商業学校の生徒に対しても常に此く訓示されて居る。

又本校にては学生の海外発展を奨励し、ために海外事情研究会を設けて名士を聘して講演会を開き、又地図絵端書などに由つて生徒を啓発せんとして居る。先生は此く遠大なる所に生徒をして着目せしむると同時に日用書簡の様式などに就いても随分注意して居られる。書簡には儀禮があり尊卑の別がある。世間が全く之を閑却して居るのは歎はしいことである。先生は生徒の手簡で若し作法を辨へぬものがあれば實地に就いて指導してやる。極めて些事のやうではあるが其の親切なことはいふまでもなく、生徒のためになることは少しも厭はぬ。是等は恐らく他に見られない美風であると思ふ。

【告知絵写真「校長及びクラス先生を繞りて」】

一二

本校は三月末日迄生徒を募集し、四月の三日に試験するのを以て常例とする。但し時によりては変更することもある。（下宿などは事務所に於て便宜を取り計らふ）入学許可を受けたる者は発表の日から三日以内に手続を了する。授業料は月額九圓（第二部は八圓）学友会費一圓（第二部はなし）四月入学の際は入学金五圓又第一部生は学友会費入学金五圓を要する。教科書は教場に於て受持先生が指示せられる。一年生は四月二十三日に宣誓式を行ふ。此以前に入学式がある。夏期休業は七月十一日より九月十日迄、冬期は十二月二十五日より一月七日迄、春期休業は四月一日より十日迄である。尚五月十九日は巣鴨学園全体としての記念日であり、十一月二十五日は学校創立記念日である。此れが中々賑かで仮装行列、演劇其の他種々装飾などをやる。

位置は大塚に近い。山手線でも大塚驛で下車する。市内電車も大塚終点である。其れから西へ入り、六町許り、巣鴨高商通りといふを経て本校に達する。校外でもあるから市中の様な混雑はない。又池袋驛からは十二三町である。道路は十二間道路で極めて宜い。



|             |                   |            |       |
|-------------|-------------------|------------|-------|
| 学<br>校<br>長 | 修身、社会學、哲學         | 文學博士       | 遠藤 隆吉 |
| 教<br>頭      | 国語、漢文             |            | 竹内 松吉 |
|             | 独逸語、地理            |            | 遠藤 健吉 |
|             | 民法                | 法學士        | 近藤 英吉 |
|             | 英語                | 海軍機関中佐     | 坂部鐵三郎 |
|             | 英語                | 文學士        | 藤井 春吉 |
|             | 独逸語               | 文學士        | 大畠 清  |
|             | 英語                | 文學士        | 菊川 正勝 |
|             | 独逸語、社会學、哲學、文化史    | 文學士        | 黒川 純一 |
|             | 商業算術、自然科学、数学、商品理化 | 理學士        | 井上 清恒 |
|             | 交通論、經濟學、經濟史、工業政策  |            | 川西 正鑑 |
|             | 英語                | 文學士        | 植田 虎雄 |
|             | 憲法、民法、法學通論        | 法學士        | 松永 増治 |
|             | 英語                | バチエラーオブアーツ | ボット   |
|             | 独逸語               | 文學士        | 多田 鐵雄 |
|             | 修身、教育學            | 文學博士       | 田中 義能 |
|             | 憲法、法學通論           | 法學博士       | 中村 進午 |
|             | 自然科学              | 文學士・理學士    | 本田 親二 |
|             | 數學、商品理化           | 理學士        | 児玉 東一 |
|             | 社会政策              | 經濟學博士      | 永井 亨  |
|             | 統計學               | 法學士        | 松田泰次郎 |

|                             |            |       |
|-----------------------------|------------|-------|
| 商業作文、保険學、商業政策、<br>商業地理、商業英語 | マスターオブアーツ  | 梅崎 覺一 |
| 憲法、法學通論、商法                  | 法學士        | 廣瀬 武文 |
| 国民性研究                       | 文學博士       | 石橋 智信 |
| 商業作文、商業通論、經濟英書講義            |            | 石井 靜人 |
| 企業經營、簿記、會計學                 |            | 青山 楚一 |
| 商業算術                        | 理學士        | 粕谷 壽郎 |
| 財政學、商業政策                    | 經濟學士       | 芹澤 彪衛 |
| 修身                          | 文學士        | 岩橋 遵成 |
| 珠算                          |            | 高井計之助 |
| 珠算                          |            | 佐野 十郎 |
| 教練                          | 配属将校陸軍歩兵少佐 | 井上 美暢 |
| 教練、體操                       | 予備陸軍騎兵特務曹長 | 杉野 亘  |
| 數學、自然科学                     | 理學士        | 菊地 幸雄 |
| 英語                          | 文學士        | 杉木 喬  |
| 教練、體操                       | 予備陸軍騎兵特務曹長 | 飯塚林之助 |
| 教練、體操                       | 予備陸軍騎兵少佐   | 内田 哲雄 |
| 東洋經濟事情(選)                   | 文學士・理學士    | 小山 榮三 |
| 植民政策(選)                     | マスターオブアーツ  | クラウス  |
| 簿記、英語經濟                     | 商學士        | 中西 旭  |
| 數學                          |            | 鈴木 佐市 |

會計課長  
庶務課長  
人事課長  
図書掛  
第一本科事務主任  
同  
第二本科事務主任

法學士  
法學士  
法學士  
法學士

田村幸次郎  
馬淵政雄  
岸田繁次郎  
小林長理  
武安満  
笠井一男  
本橋元治

巢鴨学園の歌

一

紅塵遙かに  
萬木翠り  
天聳り立つ  
三層樓  
此處にし學ぶ  
丈夫我等  
日本の柱  
大地の光  
偉いなる哉  
母校の使命  
勇めくくく

二

学問労働  
人たる權威  
流俗の差等  
幻のみ  
我が意志盤石  
我が勇火焰  
険しき修行の  
峰踏みさくめ  
偉いなる哉  
母校の使命  
励めくくく

三

八絃宇と為す  
理想を抱き  
戦士の氣もて  
机に向へ  
西方伯林  
東方巢鴨  
将来文化の  
両翼たらん  
偉いなる哉  
母校の使命  
奮へくくく

【口絵写真】



本 校 舍





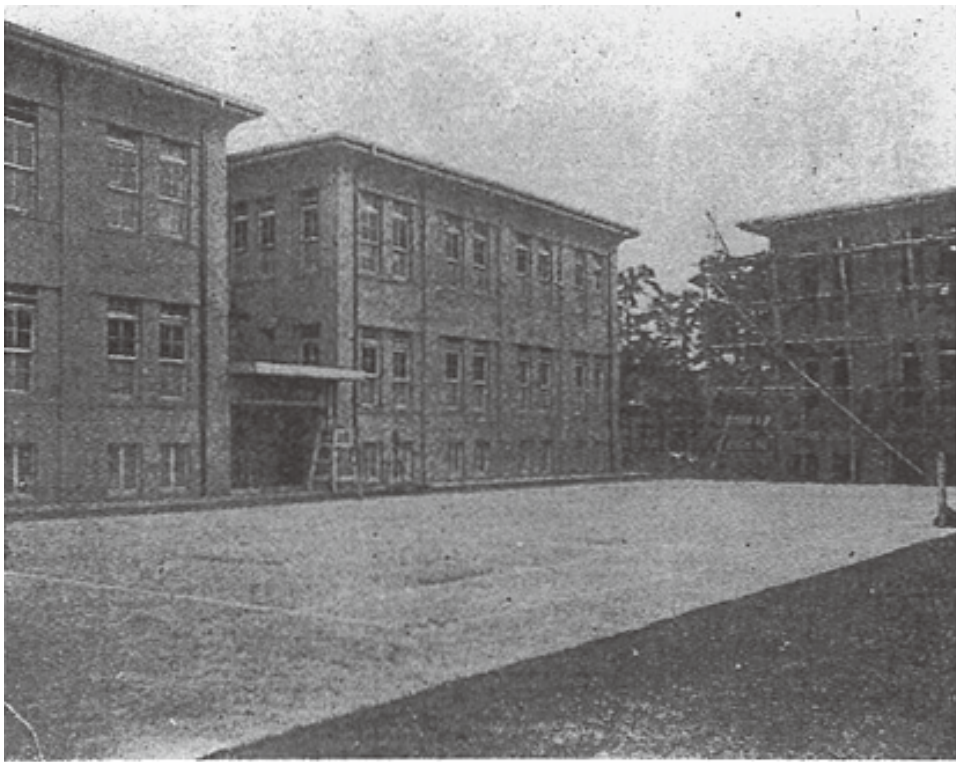
校長室に於ける校長



隅田川の上の集鴨高商クルー

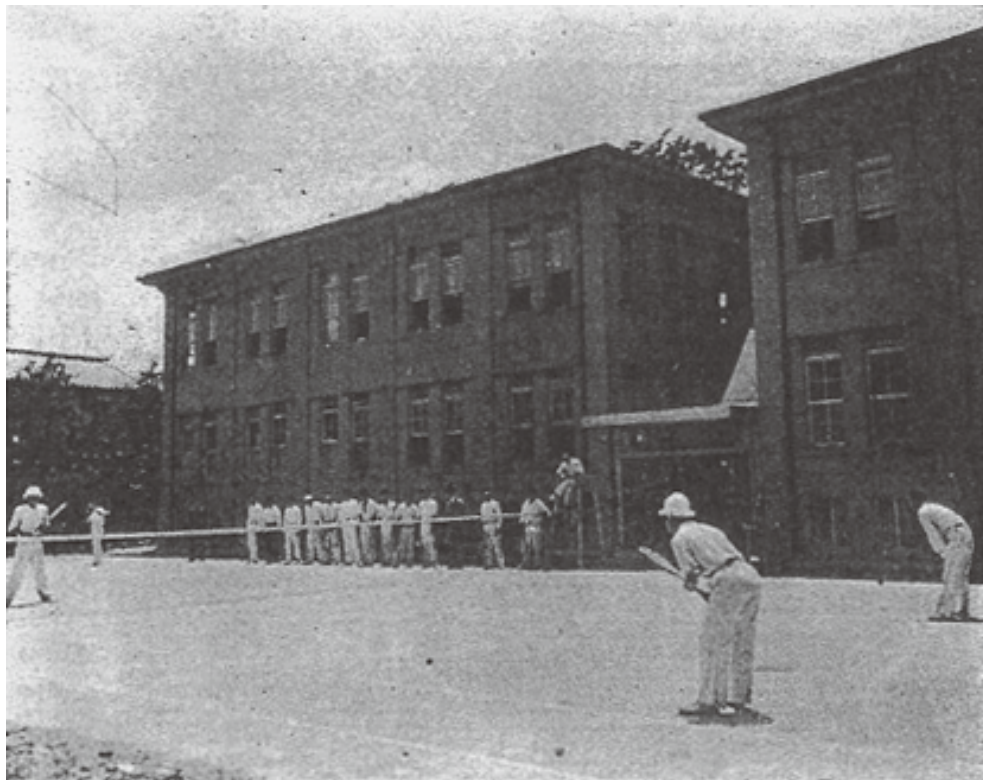


手選部球野商高鴨集

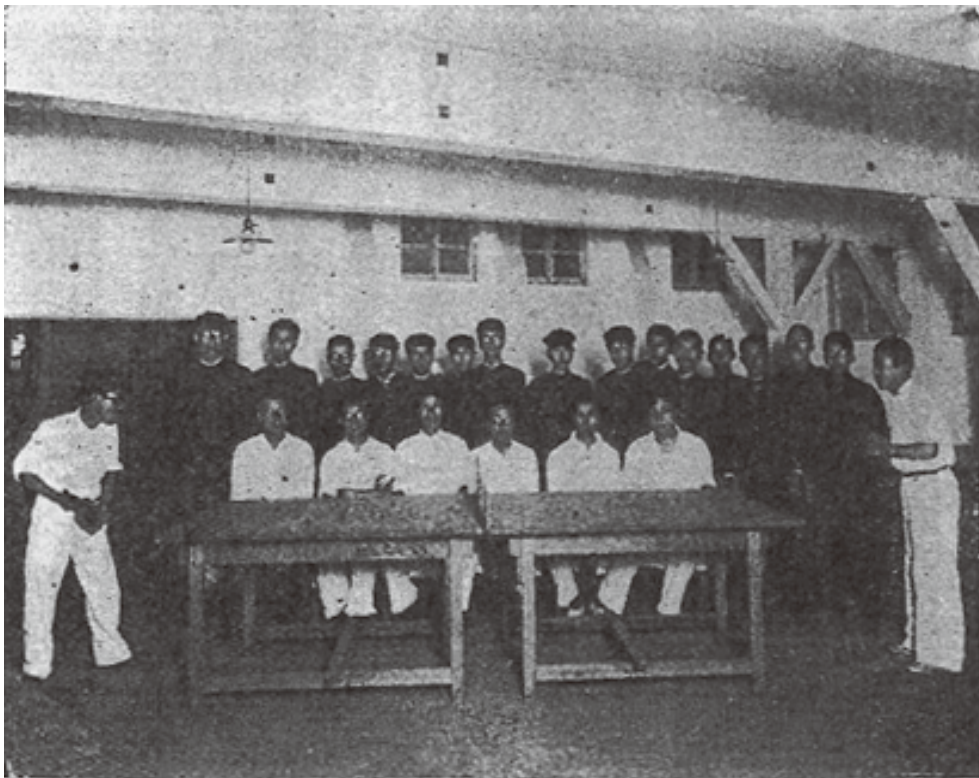


部 一 ノ 舎 校





スニテる 於に トーコ 庭校



習練猛の部ンボンビ





中村博士の憲法講義



てり繞を生先スウラクび及長校

二〇二五年三月三十一日発行

千葉商科大学 総合研究センター

遠藤隆吉研究所 資料調査報告 第二号

## 「巣鴨学園

## 巣鴨高等商業学校一覧」

編集 千葉商科大学 遠藤隆吉研究所

浅沼薫奈（千葉商科大学特別客員

教授・遠藤隆吉研究所客員研究員）

発行 千葉商科大学

千葉県市川市国府台一丁目三一

印刷 童心印刷株式会社